

たが、沖繩は米軍占領で最後の引揚船LSTで帰らないと帰れないとのこと、妻を説得して同年十月八重山に引揚げた。

三女を失い、私は強制収容所へ

高知県 川 澤 利 幸

昭和七年といえば、上海で抗日運動が激化し、上海事変が勃発した年であり、北朝鮮では盗賊が鮮満国境にちよう梁し、治安をかく乱している時でもあった。

そのような状況で、私はその年の七月、北朝鮮の治安警備の任務に着くべく大志を抱いて渡鮮し、二十一歳で警察官になった。そして、北朝鮮のへき地で治安その他の警察任務についた。

鮮満国境は前述のような治安状況であったので、しばしば危険な場面にもそうぐうした。そして、二十七歳となり、妻を迎え、女の子四人をもうけたが、うち二人を病気で続けて亡くしたときは医者はいないへき地勤務の

悲哀を痛切に感じた。

終戦直前、北朝鮮の咸興から京城の総督府に連絡用務のため出張することになった。そして咸興駅でポツダム宣言受諾の終戦の詔勅を聞いたのである。その放送を境に、治安は一変し、日本人に険悪な状況となった。連絡用務を終え、帰路に付いたが、ソ連兵が海上から元山(二十八線に位置)に上陸し、南朝鮮との交通を遮断してしまった。そのため、列車が動かなくなり、徒歩で降り着いた。途中、鮮人の保安隊に何度も検問を受け、危険な目にもあった。咸興ではソ連兵が大型トラックで倉庫や商店に乗りつけ、略奪をほいままにしており、また婦女子が襲われる等、敗戦のみじめさを見せつけられた。

二十年九月のある夜朝鮮人の保安隊が来て「日本に帰してやるから」と言って私はひとりトラックに乗せられ、他の同僚等とともに咸興の刑務所に収容され、ソ連兵の取り調べを受け、凶們、延吉、ハルビン、北安と転々と収容所を移動し、強制労働に従事させられた。その間、食事はほんのわずかしかあたらえられず、空腹のため、排水口にたまっている残飯を拾って食べたこともあった。

過労と栄養失調で壊血病や赤痢にもかかわらず、どうか耐えて二十一年九月、コロ島から乗船、佐世保に上陸した。

帰国するまでは、妻や子どもの安否は判らなかつたが、元気で帰っていたのでほっとした喜びは今でも忘れられない。

妻は私が連行されたあとで五女を生んだが、その子はすぐ死亡し、その埋葬やソ連兵の侵入、鮮人のいやがらせ、子どもの病気、食糧の欠乏等で苦勞したが、脱出の機会があつて、漁船をやとい、二十八度線を海上突破し、南鮮を転々として、釜山で乗船、博多に上陸したが、二児の遺骨箱に隠してあつた時計や亡母の形見の指輪まで全部鮮人に取られ、無一文となつたとのことである。

高知に帰つて復職したが、借家住まいで、家財道具は皆無、茶碗から箸まで買つての耐乏生活で、長男、次男が生まれ、家族六人となり、薄給のため、妻は幼児を連れてのアルバイトで家計を助け、苦しい生活が続いた。

そして子どもは順調に成育し、今日に至つたが思えば、その間の苦勞は筆舌にはつくせないものがあつた。

技術者として残留

宮城県 鎌田末雄

昭和五年頃、米一石十七円五十銭、土工一日六十銭から八十銭、年貢米を納めるとや々と食べるだけの生活。

昭和六年六月、朝鮮咸興歩兵七十四連隊にはいる。九月十八日、満州事変が始まり、七年四月三日、出勤することになり、現地へ。八年六月まで転戦三十五回、ぶじ現隊で除隊。日本窒素興南上場の採用試験に合格した。

(六百人の中から三千人だけ採用)。九年四月、事変の勲功で旭八に賜金二百二十五円をもらう。二百円を兄に送つた。興南工場で、八年六月から二十年終戦時まで働いた。入社当時の日給は、一円三十二銭、三千立方メートルのガスタンク十六基もあつて、アンモニアガスを混合するガス係勤務だつた。十四年結婚。

終戦となり、ソ連兵に全部接收され、社宅から着の身着のまま出され、応峰里という山中のオンドル間三疊